

人生の「物語り」を生きる

著者	佐賀枝 夏文
雑誌名	真実心
号	21
ページ	65-90
発行年	2000-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000619/

人生の「物語り」を生きる

佐賀枝夏文

はじめに

皆さん、こんにちは。大谷大学の佐賀枝です。今からお話することは多くの皆さんにとつては縁遠いことかもしれません。中におひとりかおふたり、もし辛い気持ちでお座りでしたら僕の言葉が通じるかなと思います。多くの方は佐賀枝さんがお話することを聞いていただければと思います。今、皆さんに語りかけることが全部必要だとは思いません。ですから楽にして聞いていただけたらいいと思います。

一 僕の悩み

皆さんは小学校の入学から短大・大学までの教育過程を、どういう形で学んでいらつしやつたでしょうか。小学校の時の僕はどうかだつたかなと思うと、白日夢をずっと見ていたような感じがします。白日夢、デイドリームは、心がここにはない状態をいいます。僕はそんなにやんちゃでもなかつたので、小学校の頃は教室にはいました。今と言うと緘黙児だつたと思います。あまりしゃべらない生徒でした。友だちからどちらかというといじめられるタイプでした。ずいぶんいじめられた思い出があります。

小学校の頃は所在なげにずっと窓の外の景色をぼおつと眺めていたような気がします。その頃から僕の人生の旅は始まつたのではないかなと思います。何かその場所にこれという幸せがないみたいに、僕にとっては、この場所、その教室にすることがとても不幸な感じでした。これが僕の本当の生き方でないような感じがしていました。その頃からメーテルリンクの「青い鳥」を探し始めたのではないかと思ひます。

人生の「物語り」を生きる

体はそこにあつて、心が旅をし始めていたような気がします。

小学校を終えて中学校に進んだ頃、古い写真を見ると僕は少しふつくらとしていたような感じでした。ふつくらとして相変わらず所在なげで、とても健気な男の子だったような気がします。あまり口数が多くなくて、中学校になってからは透明人間になっていったような気がします。なるべく教室の中で目立たないような形で、一番、先生から見えないところに陣取るのが僕の居場所だったような気がします。その背景にあるエピソードがあります。僕はずいぶん早いうちに、五歳で父親と死別しました。また、小学校二年生の時に、母親と生き別れというと語弊がありますが、母親と別れて暮らすことになりました。理由があつて、祖母と祖父と暮らしました。おばあちゃんという母親と産みの親の母親と二人の母親を持つて生き始めることになりました。おばあちゃんは浄土真宗大谷派のお寺の坊守さんで、ずいぶん信仰の篤い愚直な人です。僕の産みの母はずいぶん派手好みで、とても落ち着きのない母親でした。とかく人の悪口を言う、それが僕の実の母親です。そういう二人の母親の間で育つという問題も抱えてしまいました。

一二 思春期のあらし

その問題を抱えた僕が高校生になりました。高校生の時には、少し理由わけがあつて遠方の高等学校に行かなければなりませんでしたが、僕の理由です。それもずいぶん辛い思いをしました。一番近い高等学校に行きたかつたなということもありました。そういう僕なりの問題を抱えていました。高校生活では、月曜日は辛い思いがきつかつたように思います。NHKの「のど自慢」のテーマソングと鐘の音を聞くと、少し体が硬直して、また明日から始まる学校の生活が苦手だなという思いで、少し心と体で反応していたような気がします。

大学生の時は大谷大学に学びましたが、次から次にクラブ活動を変え、次から次にいろんなことに挑戦してみました。とにかく落ち着きのない大学生時代だったような気がします。何か新しいもの、新しい人と出会うことによって自分の人生が幸せになるのではないかと思っていたようです。今から思うと仕切りなおし、もう一度、再生

人生の「物語り」を生きる

のイメージを持っていたような気がします。大学生になってやり直しができるのではないかと思っていました。僕の心の中で、小学校、中学校、高等学校を消しゴムがあったら消してみたいなと思ってたんだらうと思います。

その僕が仕事に就いたのが重症心身障害児の福祉の仕事でした。福祉というのは幸せという言葉に置き換えられますので、今から思うと一番幸せの欠けた自分が、福祉の仕事に就くことで幸せが発見できるのではないかと、僕なりに思ったような気がします。今、大きな深い反省を込めて、出会ってきた子どもたちとか、障害を持った人たちにお詫びをしたいなと思うんですが、福祉の仕事に就いたからと言って決して福祉的ではないと思います。福祉の仕事にさえ就ければ福祉ができる僕は勘違いしていたような気がします。

僕は福祉の仕事を約一二年間やりました。一二年間は自分自身の幸せを求めるような「心の旅」だったと思います。それ以外にはなかったような気がします。今、一つだけ深い反省を込めて言えるのは、僕は絶対優位に立つ健常者です。障害を持った人たちは絶対に健常者になれないと勘違いしていました。ある意味では恵まれない人た

ちに対して、僕は何か施しを与えているような、ずいぶん間違った考え方をしていたような気がします。

今年で五一歳になります。五一歳になる自分が、人生の中で、いろんなことに出会い、仕事に出会い、人たちに出会い、その中で考えてきたことで、今、僕が少し、まとめてみようかなと思っていることをお話してきたら幸いかなと思っております。

三 喪失の体験

冒頭にお話ししましたように、僕自身の中で、「失うこと」「捨てられること」が課題だったということが最近になってわかってきました。それまでは、何か欠落したものを埋めることに必死だったような気がします。埋まらないものを探し続ける旅だったような気がします。いつも一人でとぼとぼと探してきたような気がします。心の旅の道中でたくさんの人と出会い、たくさんさんの仕事に出会い、その中で転々と仕事を変えてきました。一番最初に就いたのが重症心身障害児の施設で、おそらく今から思え

人生の「物語り」を生きる

ば僕の心と体が、それほど重たい障害を持っていたような気がします。

次に移った施設が母子通園施設でした。母親と子どもが通園する施設というところが僕の心の中に引っかかったような気がします。母親と別れて暮らさなければいけなかった僕にとっては、母子通園施設で仕事するのは、客観的に見てその意味でよくわかるような気がします。その後、肢体不自由児、脳性マヒの子どもたちを治療する施設に移りました。その後、脳溢血で倒れた人のリハビリテーションをする施設での仕事をそこでやり終えました。何か探してたんでしょね。重症心身障害児の施設に勤めた二年間で僕が探し求めているものは発見できないなということは何となく感じました。今から反省も込めて思うのは、単調な毎日、来る日も来る日も食事の介助とか排泄のお世話、後片付け、散歩に出るとか、その日常の中で、僕が探しているものは埋まらないと思ったのでしょうか。空虚な自分の心を満たしてはくれませんでした。そのことは今少し、反省も込めてるんですが、きっと処遇されるその子どもたちにとってははずいぶん辛い思いをさせたのではないかと思えます。母子通園施設は、僕にとっては別れて生きていかなければいけなかった母親との出会いを、そこで探したの

だと思いますが、それでも残念ながら僕が求めているものはなかったような気がします。その後、脳溢血で倒れた方の施設で、リハビリテーションの仕事を就きました。当時、全く僕は、自分の中で一つこうだったのだろうと言えるほどの方向性はまともっていませんでした。

人とたくさん出会ってきた中で今、見つめてみようと思うことがいくつもあります。その一つは、僕自身が失ったものを、出会った人たちが、どのように心の中で処理していたかを探していたような気がします。でも毎日の施設での生活は濃厚にそのことを体験することはなかったように思います。今しみじみ思うのは、そのことが終わってから、二〇数年過ぎた今、僕の中で、そのようなことだったのかなと少し思います。僕が出会った、僕自身にとって強烈な印象がある、リハビリテーションに来る人生の半ばで障害者になっていった人たちとの出会いのエピソードをお話ししてみたいと思います。どの方も僕よりは年上でした。脳血管障害と言われる、出血にしろ、血栓にしろ、疾患は好発期が四〇歳後半から六〇歳位ですから、働き盛りです。僕にとつて大事な、何度も反芻して出てくる人がいます。それは実名とは違うのですが、タケ

人生の「物語り」を生きる

さんという人です。タケさんは鳶職をしていて、「鳶のタケ」と言われていた人です。鳶のタケさんが鳶職をしていた頃は日本の国がとても上り坂でビルがどんどん建っていく時でした。その中で、タケさんは休みなしにたくさんの仕事をこなしていたようです。仕事に行くのが嫌な日もあったそうです。その時は、酒屋さんの前の自動販売機でワンカップをおおって現場に行ったそうです。少し過労もたたったのか、前駆症状が二週間前くらいからあったそうです。頭が痛い、体が重いなど。その当日は大きな鉄のハンマーで後頭部をしこたま殴られたような感じだったそうです。脳の中で出血したからです。気がついてみると、病院の中で看護婦さんに揺り起こされ、今から仕事に行かないといけないのに、体が動かない、言葉が出ない。一時的に言葉も出なかったそうで、その時のショックは大変なものだったと言っておられました。

今になって僕がタケさんの一つの生き方を俯瞰して言えるのではないかと思うのは、タケさんが最初に失ったのは、体の半分、右の方の出血でしたから左半身の麻痺です。体の半分が麻痺してしまいました。タケさんの麻痺の様子をしこたま知らされたことがあります。リハビリテーションの訓練の部屋でタケさんと訓練をしている時に、冬

場だったと思いますが、僕は暖房が少し暑いので暖房を消したことがあります。その時にタケさんは、「佐賀枝さん、お前はね、福祉の仕事をしているから、福祉をわかっていると思うけど、そんなことはないんやで」とすごく怒られました。半身を麻痺した体は鉛が埋めこまれたような感じで、冷蔵庫を開けた感じ、氷を抱いているような感じがする。そのことをわからないで、俺たちに訓練するのか、と。最初にタケさんが失ったのは自分自身の体の半分でした。生涯、鉛を、氷を抱いたような体で生きていくことを強いられました。

二番目は、施設の生活で、お盆とお正月は帰宅実習で家に帰るのですが、そのことで、タケさんと押し問答したことがあります。皆さんにお盆とかお正月は一斉に帰宅してもらいますが、タケさんはその頃になると、「佐賀枝さん、佐賀枝さん、何でもするから施設に置いて」。本当は施設の一斉休暇で職員も休暇をとりたい、とらなければいけないこともあって、タケさんには悪いことをしたなと思います。話しをするから、どうしても置いてくれないかなと言って、話しをしてくれた時、タケさんはこんなことを言っていました。実は、俺は小さい時に早く両親が亡くなって兄貴と二人

人生の「物語り」を生きる

兄弟で薦職をしているが、病気で倒れるまでは義理の姉さんが「タケ、タケ」と大事にしてくれて、「お酒飲もうか」「新しいシャツを買ってきたからどう」と大事にしてくれた。ところが、病気になって障害者になってから僕が家に帰ると、兄貴の家は二階建てで、中二階の物置がある。俺はお正月、お盆で帰宅実習で家に帰ると、物置に上げられてしまつて、そこに姉さんが一日の食べる分のおかずとご飯を上げて洗面器を置いて下りていつてしまふ。俺は何もないところで一日暮らさないといけない。一番困るのは、夏の暑い時、洗面器の中で自分で排泄したものと一緒に生活をさせられるのが辛い。俺にとつては、人間関係が切れたのではないかな、と言っていました。彼自身、自分が持つて生まれた健康な体の一部を失い、もう一つは唯一頼りにしていた人間関係をそこで寸断されてしまった。

タケさんのリハビリテーションが完成して、次のステップアップできる施設があるので、そこに行きませんかとミーティングをしたことがあります。「タケさん、次の施設に言つて仕事をしない?」。またタケさんが怒るんです。いつも何かあると怒られるんです。「佐賀枝さん、俺から薦職を取つて俺に何をせいというのや。俺は学校

を出てから薦の仕事しかしたことがない。その俺に何をしろというのか」。その時は僕はよくわかっていませんでしたが、今からしみじみ思うと、一番最初に失った自分自身の体、次に人間関係、とても大事にしていた唯一の人間関係を失ったんですね。三番目に自分の生活を支えるための職を完全に断れてしまったわけです。そのタケさんのことから学び得るとしたら何なのかなと考えざるを得ませんでした。未だに考えているところがあります。

タケさんは、実は、二度目の出血が来て再発して他界してしまいました。もう彼に会って僕の心を伝えようもありませんが、彼との施設での生活の中で思い起こすことが一つあります。自由時間、余暇時間がある時、子どもの施設と併設されていましたので子どもの施設に行って着替えを手伝っているタケさん。もう一つは夕日が大きく落ちていくのを窓越しにずっと眺めていたタケさんです。もう一つは、タケさんが僕に「佐賀枝さん、話、聞いてくれるかなあ」という時は、過去の話ばかりでした。過去の栄光、体が麻痺する前、人間関係が順調に滞りなく結ばれていた頃のことです。すべて失う前の健康な時、仕事はえらいけれども、頑張っていた時の話ばかり聞かせ

人生の「物語り」を生きる

てくれました。過去だけを見つめていたタケさん。言葉で表現すると人生を諦めざるをえなかったタケさん。タケさんから一つ学んだことは、失うことは諦めに通じてしまふのだということだと思います。でもそれでいいとは思いません。未だに考え続けているところがあります。失ったこと、人生の中で失っていったことが、どのような形で人生を彩っていくのかを未だに探しています。その中で、幾つか出会ってきたことから、お話ししていきたいと思います。

四 幼児期につくられるもの

大谷大学で、本願寺の八代目の蓮如上人の五〇〇回忌の法要に向けて論文集を出すことになりました。それで、蓮如さんのことを調べてみたことがあります。一度調べてみたかった理由は、蓮如さんが六歳の時、お母さんと生き別れをしていることが気になったんです。蓮如さんは「御文」をたくさん書いて布教活動をされました。蓮如さんは八五歳で終命されましたが、後になってお弟子さんが話を聞いて書きとどめた

ものが、聞き書きとして残っています。僕が探し当てた空善さんが書き留めた『空善聞書』に、気になる文章がありました。

その下りは「お母さんが、もし存命中ならば、一度でも会いたいものだ。実は私は六歳の時にお母さんに捨てられて行方がわかりません」という内容です。聞き書きの中に「捨てて」という文字が出てきます。七五歳になった蓮如さんが、お母さんと故あって「別れた」のではなく、「私が六歳の時に母親か私を捨てて行ってしまいました」という言葉に出会った時、蓮如さんでさえ、七五歳に至るまで、「私は故あって母親が私を捨てて行ってしまった」という言葉を読み取った時、人生に起承転結、起の巻、承の巻、転の巻、結の巻があるとすると、起の巻でできた出来事が生涯の物語りがある程度彩るのではないかということを思いました。そのことを蓮如さんの物語りから、僕は学んだような気がします。

失うこと、そのことがどのように人生を彩っていくか。「佐賀枝さんの性格はどう？」と言われると、自信がなかったり、悩みが多かったり、不安があったりします。とても不安から逃れにくくて、悲しさに弱いと思います。その僕がどうしてこのよう

人生の「物語り」を生きる

な形で「自分らしさ」ができたのかを考えます。今までに至るまでは、自分の性格が変えられたらいいのにと変身願望が強かったような気がします。生まれ変われたらいいのに。生まれ変わることは難しいですが、この悲しい心と、この自分の体に障害が出たこともあって、この心と自分の体でなければ、もつと幸せではないかと思えました。つい最近まで、僕は変身願望の塊だったような気がします。この悲しい心さえなければもつと幸せなのになれるのではないかと思っていました。この体でなければもつと幸せなのに、そのようなことをずつと考えていたような気がします。僕が、臨床心理学に関心があったのは、自分自身の中の悲しみ、辛さを何とかしたい。そのことが僕が臨床心理学に向いた理由だと思えます。とにかく悲しさから、辛さから逃れたかったのだらうと思います。

五 不服申し立てと思春期

今、僕はどのように考えているかといいますと、幼児期と思春期と思春期以降を考

えてみると、その人の自分らしさを作る原型のようなもの、鑄型のようなもの、思春期までに自分らしさを作る鑄型は幼児期にできるのではないかと思えます。その鑄型に対してクレームをつけるのが思春期ではないかと思えます。幼児期に作られる自分らしさの原型はどのような形でできるかというところ、親が、保育者が、教育者が作ると思って作れるものではない気がするのです。子供自身が作ろうと思っても作れるものでもないと思えます。

僕の人生を省みた時に、僕の周りの親、環境は僕をこのような悲しみを持った僕を作ろうとは思わなかったと思います。こんなに苦労するような人生を歩む僕を作ろうとは思わなかったと思います。でも、それは一つのささやかな結論だとすると、作ろうと思って作ったものではなく、いろんな要件があつてでき上がってしまうのが、幼児期にできる自分らしさの原型だろうと思えます。おそらくその原型を持つて人は生きていくので、一〇人いれば一〇人同じ情報を聞いても違う。一〇〇人いれば一〇〇通り、原型が違うのだろうと思えます。この自分らしさの原型ができた源を辿っていくと、最初にお話しした辛い生き別れとか死に別れの中で、辛さに弱かったり、悲

人生の「物語り」を生きる

しさに敏感だったり、そのような原型を作ってしまったのでしょうか。この原型に対してずっと僕はクレームをつけてきたような気がします。この状態からどうしたら逃れられるか。転々と職を変えて新しいところにさえ行けば、自分の人生をやり直せるのではないかとか、埋まらないものが埋まるのではないかとか。そのようなことで僕は一所に留りませんでした。飽き性だったり職を転々としたのは、そのようなことを引きずっていたからだという気がします。

「あるがままの自分」の姿が見えない。自分が生きてきた中で、幼児期に辛い体験に会わなかったら幸せだったのに、このようなことがなければ小学校、中学校、高校時代もっと楽しいのにと、自分にずっと言い続けていたように思います。ここにいるから幸せじゃないんだろうと思っていたような気がします。これが青い鳥をずっと探してきた道筋だったような気がします。僕の人生の謎を解く鍵を、仕事から、勉強から探してきたのが僕の生き方です。決して学問的に積み上げてきたわけではなく、実際に探さざるをえなくて、社会福祉をやり、臨床心理学をやってきたわけです。

皆さんの中で、もし気持ちの中で、今、私が生きている家庭の状況、学園生活の中

で居心地の悪さを感じている人、佐賀枝さんが学生時代に体験しただろう居心地の悪さを感じている人があるとすれば、今僕が皆さんに言えることは、一つは、「いろんな形でアタックして、いろんな形で人と出会って、チャレンジしたらいいよ」と言いたいこと、もうひとつは変身願望は危ないのではないかということです。僕が自分の中で悩みを増幅させたり、体で心身症になったり神経症になったり、ずいぶん状態が悪いとところに落ち込んでいった理由は、変身すること、にあったような気がするからです。

六 「自分らしく」生きる

ここで一つ、エピソードを挟んでみようと思います。出会ったきた人生の中に答えを探し、また蓮如さんの人生の中に探してきました。ここで一人の人を紹介してみようと思います。少し古い人ですが、九条武子さんという西本願寺で生まれ育った方の話です。九条武子さんは京都女子大学の重要な創設者の一人だと言われている人で

人生の「物語り」を生きる

す。九条武子さんのことを調べている時に、こんなことがありました。お兄さんは大谷探検隊を編成して仏教の典籍を日本に持ちかえって仏教に貢献した人です。東京築地本願寺のヨーロッパ風、インド風にミックスした建物もそのひとつです。お兄さんの光瑞さんと武子さんはエネルギーシユな人だということがわかります。武子さんは元々は大谷武子で、嫁いで九条武子になった人です。

武子さんの人生で着目に値するようなことがあります。武子さんは、佐々木信綱に師事して歌をたくさん詠んで著名です。九条武子さんは一つの転機が三五歳に来ます。三五歳まで、どのような人生だったかというところ、九条良致と結婚してインドからロンドンに渡りました。夫がケンブリッジ大学に留学して、当時の正金銀行のロンドン支店勤務でしたが、武子さんに「あなたは日本に帰りなさい。私はロンドンに留りますから」とその後一〇年間、九条武子さんは日本で夫を待ちつづけます。三四歳の時に夫がロンドンから戻ってきて、二人で生活したのが東京築地本願寺です。三五歳の時、九月一日の関東大震災に遭います。その日の一時ぐらいに、第一震があつて、その後、築地本願寺が類焼して燃えてしまうのが夜九時くらいです。三時くらいまで武子

さんはまだ焼け落ちない築地本願寺の役宅にいたわけです。当時三〇〇数か所から類焼したので、危ないからと三時頃から避難を始めます。最終的には浜離宮に身を寄せたのですが、その間に累々とした死体に出会う。「私はすべてのものを失いました」と書簡が残っています。佐々木信綱が武子さんの書簡を編集したものが残っています。震災前後を調べてみますと、九月一日に震災にあつて第一信を兵庫県の小西酒造の奥さんに手紙を出している。第一信は客観的な冷静な手紙です。「私は震災に会いました。身一つですが、無事にいますからご安心下さい」と冷静な感じですが。二信は、悲しみと混乱と悲嘆が混じりあうような手紙です。第三信は三週間後の手紙です。異例に長く、原稿用紙で二〇数枚になる長文の手紙の中で、一つ言葉を残しています。「甦生」という言葉、甦って生きてみたいと。「すべて私は失いました。このあとの生き方は甦って生きてみましょう」と。

三五歳の武子さんは、それから焼け跡に二張りのテントを建てます。一つのテントは震災で怪我をした人の救護テント。もう一つのテントは両親を亡くし、身寄りのなくなった子どもたちの救護用のテント。この二つのテントは武子さんの並々ならない

人生の「物語り」を生きる

努力の結果、一つは、児童養護施設として六華園という施設になります。もう一つは、あそか病院になっていきます。武子さんは、なぜ京都に帰らなかったのか。焼け跡に残ってお姉さんから着物を借りて、そのまま居つづけて、結局、四一歳で亡くなります。すべてを失って、ここで甦生してみようという、「甦って生きてみましょう」という言葉を残して、その後六年足らず、彼女は自分の私利私欲から離れて人の命をつないでいく仕事に転換していきます。

僕はこのところを見て、失って、そこでどうその人が展開していくか。一つのポイントになるのではないかと思いました。タケさんは過去へ変身できたらいいなと思っていたように思います。佐賀枝さんもこの心と体でなければもっと幸せだと思っていた。過去には決して戻れなかったタケさんはそこで人生を諦めたのです。佐賀枝さんは夢を求めて幸せを求めて青い鳥のように転々としていくけれども、幸せの鳥が掴めなかった。武子さんのこの話を聞いて、武子さんは一つの人生の中で失ったものを契機に「転身」できたのではないかなと思います。この体とこの心は変わらないけれども、この体と心を持って生きましよう武子さんは見つけたのではないかと思います。

「転身」と「変身」の境目が、おそらく僕たちが今から人生を生きていく時に、見つけていくポイントになるのではないかと思います。変身は、ままならない人生、思いどおりにならない人生、だから変身して生きてみようとなるのでしょうか。皆さんもままならないことがあるとすると変身して何かを得たい、幸せになつてみたいと考えることでしよう。しかし、変身願望は落とし穴のような気がします。この「転身」は、武子さんの言葉を借りると「あるがままの人生」、失つたら失つただけ、失つたことに決着をつけて生き始める。このことが人生の謎を解いていく鍵になるような気がします。ままならない人生に対して、それを埋めようと思つて過去にトリップする。ままならない人生をモノで埋めていくことで埋まらない心が増幅していく。僕は確証は持たないですが、失つたものは失つたものなりに認めていくことで、そこで生きるエネルギーが出てくるような気がします。そのことが、皆さんに伝えてみたかったことの中心的なテーマです。

人生の「物語り」を生きる

七 事実を事実として

僕は今、人生の中で失った体験をした人の人生を見ながら、それを調べています。僕のテーマの一つは喪失体験、失うことです。自分が捨てることではなく奪われること、それが僕のテーマです。悲しみ、悲嘆が僕のテーマです。僕は泣きができなかった人です。小学校から始まったであろう悲しい人生の道のりの中で僕は泣きができませんでした。ずっと自分の心を殺してきたような気がします。僕はどうして泣きができなかったのか、最近の大きなテーマでした。僕の人生の転機の際に、悲しい出来事に出会った時に、このところで決定的に変身できるであろうということを、どこかで考えていたようです。この変身の現れ方が白日夢をずっと見る。現実を見ようとしなかった。僕が、ここまで引きずってしまった落とし穴は、現実の事実を見てこなかったためだと思います。

人生を解いていく、人生をいきいきと生きていく一つの鍵となるのは、人生で悲し

い出来事に出会った時、その人がそれを事実として見ることに、事実を直視することを、皆さんどうか記憶しておいていただきたいと思えます。色々と調べていて、こんなことかなと思うことがあります。たとえばAという奥さん、Bという奥さんがいたとします。お二人とも夫と死に別れるとします。Aさんは亡くなって葬式の時に、悲しくて荒れ狂ってしまう。なんで私を残して亡くなるのか。周辺はAという奥さんを氣づかいます。Bという奥さんは冷静でお葬式を取り仕切って賢夫人で親戚にもソツがないとします。周りの人は氣づかいません。二人はどういう顛末をたどるかといいますと、Aさんは大泣きをし、その後、回復して五年後、一〇年後、それなりに悲しみを悲しみとして生きていくことができるわけです。Bという奥さんは悲嘆にくれて悪くすると抑うつ、憂うつの状態に入っていくのです。その時に氣づかれた人は回復していく。大丈夫だと思っていた人が回復基調に入らず抑うつ、憂うつになっていくのです。喪失体験の直後に、Aという奥さんは亡くなったことを実体験をしたから大泣きをしたのでしょうか。Bという人は冷静だが、どこかで事実として認めていないのではないのでしょうか。その中で自分の心を殺して、これは事実と違うんだと遠ざけてし

人生の「物語り」を生きる

まう。実体験をしていない中で時間がたって、Aさんは回復し、Bさんは抑うつ、悲嘆期に入ってしまってはいるのではないのでしょうか。

事実を事実として見ていくこと。悲しい出来事に会った時に大泣きできる人こそ幸せです。大泣きできない辛さは、その後に来るであろう悲嘆、抑うつ状態になるように思います。佐賀枝さんは悲しい出来事に会ったことは事実です。小さすぎてわからなかったから事実を事実として認識できなかったのではないかと思います。そのため長い悲嘆と抑うつの状態に入り込んでしまったと言えると思います。

でも自己弁護しておこうと思いますが、「人生の物語り」の最初の「起の物語り」で、悲嘆の起の物語りがあつたことは事実です。そのことが後の人生の物語りの誘因となつたけれども、今は変身しないでこの僕の心と体で生きていこうと思うのです。これからもどんな出来事に会っても大泣きできない僕だろうと思います。この僕の心と体を少なくとも、変身させずに、いつか転身を願いながら生きてみようと思います。変身することでは解決できないと思います。転身が人間性を回復して、いきいきと生きていけるような気がします。

おわりに

今日の話では、ずっと失うこと、人生の物語りでわたしが幸せでなかったことを話してきました。僕が願うことは失うことで、それで終わりではないだろうと思います。そのことで見えてくること、それが何か、僕の今の状態では、これがそうだと思いますが、見えてくるのがきつとあると思います。人生は幸いであればいいですが、必ずしもそうでない人が、この中にもいらっしやるかもしれません。その時には、そのことで人生おしまいではなく、その出来事の事実を見ていくことが、折れないで生きていく、自死しないで生きていくパワーになるという気がします。

元氣よく話ができなくて、皆さんの気持ちを重ねたかもしれないかもしれませんが、聞いていただいて僕にとっては幸せな時間でした。またご縁があったらどこかでお会いできたら幸せだと思います。どうもありがとうございました。

——一九九九・六・二八——